

センター新刊書紹介

Tadayo Watabe. *Glutinous Rice in Northern Thailand*. Reports on research in Southeast Asia, natural science series No. 2 ; Kyoto : The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1967. xv + 160 p.

この書は、京都大学東南アジア研究センター刊行のレポートのうち、佐藤孝教授著 *Field Crops in Thailand* について自然科学シリーズの第2号として出版されたものである。

著者、鳥取大学教授渡部忠世氏は、もち米の緑化現象に関する研究、もち米澱粉の生理学的研究をはじめ、水稲群落の微気象と生産構造の栽培学的研究に至る広い分野において研究に携わってきた作物学者である。

稲栽培に関する general survey を目的として著者がはじめてタイ国を訪れたのが1963年10月。以後、熱帯諸地域の稲研究機関を歴訪（1964年）ののち、1965年には「東南アジアにおける水稲栽培の比較研究」のテーマのもとに再びタイ国での研究に従事した。本書はこれらの研究成果をとりまとめたものである。以下章を追って内容の要点を紹介したい。

序章には著者が研究対象を北部タイに限った理由が明記されている。すなわち、同地域は熱帯稲栽培の北限、いかえれば温帯との接点に位置すること、その上、栽培される稲が主として、著者の興味をつないできたもち米であるということが主な理由である。著者によれば東南アジアにおけるもち米栽培の分布図は未だに完成されていない。

第2章ではもち米の主な性質について紹介したのち、その東南アジアにおける分布について示し、さらにタイ国におけるもち米栽培の実態をあきらかにしている。もち米が常食となっている北部タイは、北東部タイにつぐもち米の主産地を形成し、米生産量の91%までがもち米であること、ひいてはタイ国全土においても米の総生産量のうち33.4%がもち米

であることが示されている。

第3章は、北タイの水稲栽培の概況と環境要因について、とくに気象環境要因について詳述されている。著者自身の調査にもとづく水田の微気象に関する豊富な資料が示され、さらに土地利用の実態を主としてかんがい施設の現況と対比しつつ論じている。

第4章ではもち米品種の特性について、とくに Indica, Japonica のカテゴリーから分類を試み、感光性、生育日数ならびに種子の休眠性について考察を試みている。著者が調査した78品種中、多くは B type, ついで C type に属し、Japonica に属するものは認められなかったが、Indica, Japonica の中間的な性質を示すものが認められた。また、奨励品種の普及状況が地区別に詳しく示されている。

第5章では現在の栽培様式が播種、移植から収穫調整にいたるまで順を追って記述されており、全般的にみて初期の生育を抑制する方向での慣行栽培技術、たとえば double transplanting などの合理性を認めている。

第6章は代表的なもち米品種を用いてのポット試験の結果から、窒素施肥量および栽培時期と水稲の生育特性の関係を追ったのち、収量構成要素に対する耕種様式の相違の影響を論じたものである。日本稲同様、同地域のもち米では最高分け時期と幼穂形成始期の間いわゆる lag phase は存在しないこと、植物体の形態的特性はおおむね Japonica と Indica の中間的な性質をもつことが示されている。またポット試験、現地調査の結果などから、現有品種を用いた栽培においては、その栽培時期をやや遅くして生育日数を約120日程度とすることが肥沃な土壌または化学肥料の施用が可能な土壌での高収量獲得の道であることを示唆している。

第7章は単位面積あたり収量を既存の統計資料および実態調査にもとづいて考察し、高位ならびに低位収穫田の分析を試みた成果である。なかでも、北部タイの34地点を選んでの精力的な現地調査の結果

から得られた貴重な結論ははなはだ興味深いものである。すなわち結果のとりまとめにあたり、著者は調査地をもち稲単作地（低収位田）と二毛作地（高収位田）に分け、各収量構成要素と収量との相関を分析したところ、前者の地帯では単位面積あたり穂数の増加が、後者の地帯では株あたり穂数の増加がまず収量増と結びつくことを見出した。

終章では収量増加の可能性と方策について述べ、東南アジア地域における水稲栽培の改良方向を示している。とくに調査対象となった北部タイについては、その具体的方策が極めて明快に整理されており、ある程度局地的ではあるが精細に行なわれた著者の北部タイでの研究の成果を物語っている。巻末には北部タイ各地区の面積、人口、耕地面積、もち米生産量などの資料があり、また同地域における主要な病虫害のリスト、英語・タイ語の稲作用語の対比が付されている。

以上にみられるように、著者が序章で述べたごとく研究を北部タイに限って集中的にもち稲栽培研究に取り組んだ方法はみごとに成功を収めたといえよう。また、現地調査に並行しておこなわれたポット試験から詳細な生育特性が明らかにされたこと、微気象データが集められたことなどは今後類似の地域を研究する者にとってははなはだ有益な参考資料となるであろう。また大きくみれば、収量およびその構成要素を大だんに栽培時期別、立地条件別に検討を加え、今後の栽培技術確立の方向へと結びつけた方法論は、現在のごとくいささか細分化しすぎたきらいのある作物学の研究に携わる者にとってカブけとなる。ただ土壌条件についての記載がやや平板のようにおもわれるが、これはさらに出版される土壌学の専門家による研究結果にまつということであろう。また水稲の生育にともなう栄養生理学的な考察がさらに加えられてあれば、ここにみられた結論の多くがさらに普遍性を増したであろう。なお、表題は“もち稲栽培”となっているが、内容の多くは水稲栽培一般に深く関連しており、“北部タイにおける水稲栽培”とされてあっても少しも不自然ではないと思われる。（高村泰雄）

Kiyoshige Maeda. *Alor Janggus, a Chinese Community in Malaya*. Reports on research in Southeast Asia, social science series No. 1; Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1967. ix + 142p.

東南アジア研究センターの第1期5カ年計画に基づく現地調査の報告書として、社会科学系の第1冊目が発行された。天理大学外国語学部の前田清茂氏による上掲のタイトルの書物である。

序文にも触れられているが、前田氏の調査は、センターのマレーシア・インドネシア調査計画の一部として行なわれた。この計画による社会人類学的調査は、故棚瀬襄爾博士をリーダーとして、ケダー州の一農村にスポットをあてて、1964年から65年にかけて進められた。マラヤの穀倉といわれるこのあたりの稲作農村は、水路沿いに広がるマレー人農家から成るが、Alor Janggusは、このようなマレー人の村の一端に住みついた、商業および精米業を中心とする中国人の一集落である。調査の本来の目的は、マレー人村落の社会構造を明らかにすることであったが、調査が進むにつれて、マレー人農民と密接な経済的関係をもつ中国人集落の調査を行なう必要が痛感されてきた。前田氏はこのような役割を果たすために、第2年次にあたる1965年7月から8月にかけて現地調査に参加したのである。前田氏の調査は、前年度に棚瀬グループによってなされた中国人世帯のセンサスを利用しつつ、中国人に直接インタビューをすることによって行なわれた。以下、本書の内容を章を追って紹介する。

第1章 Introduction においては、調査経過の説明がなされているが、その内容はほぼ上述の通りである。

第2章 Historical Background of Alor Janggus においては、主として、中国の出身地、および来村史が明らかにされる。はじめて中国人がやって来たのは約65年前であって、Alor Janggusはこの意味で比較的新しい集落と言える。その頃は付近のマレー人村落の人口も少なく、ジャングルが多かったという。現在では、中国人世帯の数は65にのぼり、人口男子253人、女子228人、計481人を数える

に至っている。中国人の出身地をみると、福建省の安溪、南安、同安、福州の諸県、および広東省の台山、中山、潮洲、汀洲、海南が数えられるが、広東人は計10世帯で少数グループとなっている。55世帯の福建人のうち、35世帯は安溪県出身で、さらにこのうち19世帯は仙都村という特定の村から来ている。

第3章の Community Organization では、中国人集落の自治組織に関する簡単な記述が行なわれている。Alor Janggus は、行政的には、Padang Lalang 村というマレー人村落に入るが、実際にはマレー人村長 (Kutua Kampong) とは関係をもたず、自らの自治組織をもつ。しかし、これはフォーマルな組織ではなく、小学校の理事長が、同時に中国人集落の世話役 (幫助人) としての役割を果たし、重要な事項に関しては、他の二、三の有力者の意見をきくのである。

第4章の Economic Structure においては、Alor Janggus の中国人の職業構成を示した後、主要な生業、すなわち精米業、雑貨店、金舗に関する説明がなされる。これらに従事する中国人は、付近のマレー人住民を相手にして、単に精米をしたり、物を売ったりするだけでなく、「つけ」による売買とその現物による精算などを通して、かなり大きな利潤を得ている。中国人集落の階層構造において、上位をしめるのは、これらの経営者の一部であって、中位に入るのは、主に他の自営の商店主である。商店の雇い人、精米所の労働者、行商人などは下層に属する。このように集落内の中国人の間には、かなり大きな階層差が存在する。上層のものが、土地を多く持っているかという点と必ずしもそうではなく、初期の来村者の中に大きな土地の所有者が見出されるようである。

第5章 Family and Marriage においては、家族形態、婚姻年令、配偶者の決定方法、妻の出身地、中国人間の親戚関係などが記述されている。これらの中で、コミュニティの構造に関連して重要な指摘と考えられるのは、この集落において上層に分類される6世帯のうち4世帯が、安溪県仙都村出身の林という姓をもつ親族集団に属することである。彼らを中心として、Alor Janggus は、いわば「小安溪」ともいうべき性質を有する。

第6章の Religion and Main Annual Events

においては、福建人および広東人のまつる神々の名が挙げられ、また年中行事に関する記述がなされる。

第7章 Education では、中国人の強い教育への欲求から生じた集落内の小学校の歴史と、その運営および授業内容が述べられている。Alor Janggus の中国人初等教育は、1929年に15人の生徒を対象として私塾方式によって始められたが、有志の力によって、次第に正規の学校組織をもつようになる。そして、この学校経営に参加する人々が同時に村の世話人となっているのである。授業は、北方標準語によって行なわれている。

第8章 The Chinese in Alor Janggus and Their Native Places では、Alor Janggus 在住の中国人と郷里との関係がえがかれる。彼らが祖国とするのは、当然彼らの出身地であり、中国が中華人民共和国となってからも、観光旅行の形をとって、ときどき訪問がなされている。彼らは中国がよくなったことをひじょうに誇りにしているが、なお、郷里の生活よりも南洋での生活に魅力を感じているようである。

第9章の Conclusion では、既に述べてきた Alor Janggus の中国人の生活の要約がなされ、彼らのマレーシア定住の傾向が強くなっていると同時に、マレー人との同化がなお困難であることが指摘されている。

巻末には、付録として、Alor Janggus 居住の中国人世帯のセンサス結果が、33ページにわたって一覧表となっている。これは専門的な研究者にとってより詳細な分析のために有用であろう。また、本文中の地図と共に、Alor Janggus が再度調査されることがあれば、その価値を十分に発揮し得ると思われる。

著者前田清茂氏は、現代中国語を専攻しており、この調査はいわば余技として行なわれたものである。さらに、すでに述べたように、前もって集められた資料を利用することができたとはいえ、調査期間はきわめて短かった。従って、専門的な観点からすれば、記述もれがあったり、分析が十分でなかったりする点もある。しかし、それにもかかわらず本書は、マラヤ北西部の中国人集落の調査報告としては、その稀少性のゆえに、きわめて高い価値をもつと思われる。(坪内良博)